今週の
倫理

2024. 8. 17～8. 23

8月のテーマ　|　運命自招

1399号

社員一丸となって困難に立ち向かう

二〇一九年末に確認された新型コロナウイルス感染症の拡大により、深刻な影響を受けた企業も多かったのではないでしょうか。特に、二〇二〇年に緊急事態宣言が発出されて以降は、事業の休業や外出自粛の要請など様々な制限がかかり、社会全体に大きな影響をもたらしました。

今回は、そんなコロナ禍で奮闘した、ある旅館経営者の体験談をご紹介します。

Aさんは某地方都市の温泉地で、まもなく創業百年を迎える老舗旅館を営んでいます。十部屋ほどの小さい規模ながらも、景色の良い露天風呂、地場で取れる野菜・肉・魚を使った料理、スタッフの心温まるおもてなしが評判の宿でした。

しかし、コロナ禍の影響で、これまでの状況が一変しました。テレビからは「不要不急の外出や移動は避けてください」と繰り返され、Aさんの旅館でも日を追うごとに宿泊のキャンセルが増えていきました。そしてとうとう直近三カ月の予約がゼロになってしまったのです。

これまでの利益を蓄積してきた内部留保（利益剰余金）はあるものの、このような状態がもし半年間続いたら、資金繰りが悪化することは目に見えていました。しかし、いつになったらこの状況が収束するのか分かりません。そこで、女将である妻と一緒に現状を乗り越えていくための方策を考えました。そこで、倫理経営に徹して、次の二点をやり抜くことを決めたのです。

① 自分たちの給料をかぎりなく減らし、社員の雇用を守ること。

② 社員のスキルアップを図ること。

近隣の旅館では、経費削減のために人員を整理していました。そのような噂はすぐに広まり、〈次は私たちかもしれない〉と不安に思っている社員もいました。すぐにAさんは全社員を集め、「皆さんの雇用は守ります。退職をお願いすることはありません」と宣言したのです。社員皆が安堵し、暗かった職場の雰囲気が明るくなりました。

次に、就業時間をフル活用することにしました。まず、始業時は活力朝礼を徹底的に練習しました。旅館に相応しい挨拶や返事を身に付け、『職場の教養』の感想を発表し合うことで社員同士の交流を図りました。

引き続き午前中は社員教育の時間に充てました。経営理念の学習、旅館の将来を考えるビジョン発表会、礼儀・作法の体験実習などを行ないました。そして午後は、館内や屋外の清掃を徹底しました。普段の清掃では行き届かない場所まで丁寧に行ない、旅館の美化に努めたのです。

このような取り組みを一年間続け、給付金制度も利用しながら何とか持ちこたえました。その後、コロナ以来減少していた客足が少しずつ回復していきました。Aさんの旅館では、コロナ禍を契機に、困難なことにも対応できる足腰の強い社員が育ってくれました。

Aさんは社員の働く姿を見る度に、〈コロナはどうすることも出来なかった。しかし、旅館には意味があった〉と実感しています。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局